

ブラジル紀行 (その二)

昭和30年卒

高原 誠

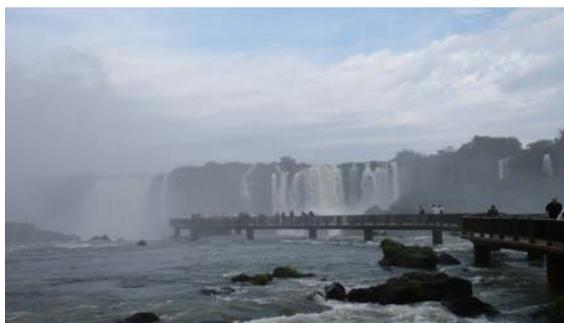


ブラジル紀行は人と人との出会いの旅と言う印象が強い。私は多くの人との出会いを繰り返しながら、ブラジルの冬の町をさまよいつづけた。疲労を感じては直ぐに休息を取れる環境に恵まれていたのは幸いであった。

第三章：イグアスの瀧

ロンドリーナから帰って来て一日休養して、イグアスの瀧の見物と北島神父とお会いする為に、右近倍枝さんと彼女の息子のアンドレ君、アルベルト君と共に行く事にした。二十九年前、ブラジルを訪れた時、大林夫妻とサルバドールとリオ・デ・ジャネイロへ行き、其処で文武君が病気になったので、直ぐにクリチバの彼の家へ戻り、イグアスへ行く機会を無くしたのであった。

今回のイグアス瀧見物は二十九年振りの念願の事で矢張り、心は躍った。サンパウロからイグアス空港へは約二時間の飛行であった。到着した空港にはガイド付きのバスが待っていた、右近倍枝さんが良く利用するガイドで日本語が話せる。



空港からイグアスの瀧迄直行する。瀧の周辺は国立公園に指定されていて、道路、標識等が整備されていた。この瀧は一億数千年前から存在していたらしい。十六世紀の中ごろヴァール・ヌニェス卿の旅程で偶然の遭遇によるものらしい。1986年ユネスコの世界遺産に登録され、ブラジル側、アルゼンチン側のいずれの国からも見る事が出来る。我々はブラジル側から見物する。瀧の轟音を目当てに進むと、巨大な瀧の全貌が見えて来た。カナダのナイアガラを遥かに上回る壮大な景観が一望出来た。私が訪れたのは乾期で、水量が少ないと言っても、一見して水量は多く、瀧の広さは予想を超えていた。滝壺から溢れる水量は滔々として流れていた。これが雨季で水量が多いと更に壮観だとガイドが話しをしてくれた。瀧の下流には何本かの橋が出来ていて、瀧を間じかに見る様になっていた。エレベーターで道路へ登ると其処にはレストランがあり、お土産が販売されていた。見物人が溢れ、賑わっていた。





瀧をあとにして、途中の鳥園に立ち寄った。此処はブラジルで見られる鳥を中心に約百五十種類、九百羽の鳥が集められてあった。この所有者は最初は個人であったらしいが、飼育が困難で公的施設になっている。鳥の外に熱帯特有の蛇、鱷も飼育されて見物する時間を忘れさせる魅力があった。数時間の散策で疲れを感じたので、近くのブルボン・ホテルへ行った。このホテルは五星の近代的なホテルで、居住性は素晴らしいものであった。



夕食は民族舞踊を見せるバファイン・レストランで民族舞踊を見ながら食事をした。熱帯特有のカン高い歌声と珍しい楽器の演奏は不思議な国と言う感覚に捉われてしまった。翌日は陸路での一本の橋を利用してアルゼンチンへ入国した。途中パスポート関係で問題があったが、ガイドの説得で無事検問を通過した。アルゼンチンのホテルはセラトン・ホテルで此処もヨーロッパ調のホテルであった。ホテルには衛生放送が見る事が出来、日本の放送も見られた。夕食は縦琴の民謡演奏があった。家内がチップを渡すと縦琴の演奏が入ったCDをくれた。そして日本の曲「上を向いて歩こう」を奏でてくれた。右近家族と一諸なのでブラジルに居るという感じよりも日本にいる様な錯覚に陥った。



翌日、朝からイグアスの瀧の「悪魔ののどぶえ」を見物した。ガイドの話だと近くにヴァンダ鉱山と言う宝石の発掘場があるとの事と、其処で北島神父と会えるとの約束を思い出した。宝石発掘の場所へ行く手前には、レストラン、宝石店が並んでいた。宝石店から特殊な車（ジープ）で発掘場まで、其処の所有者の運転で出かける。道は山道でぬかるんでいた。数十分走る

と、道路の下に発掘場所があると言う事で、入場料を取る。何の変哲もない処で、宝石を含んだ岩みたいなものがあった。発掘した動機は皿を川で洗っていたら岩で手を切ったので、これは可笑しいと思いよく調べてみたら鉱石(宝石)を含んだ石であったので、この川の周辺を全て購入したのだと言う話であった。まだまだ多くの宝石が取れそうな石が数多くあった。



中国の西安での洞窟の発見みたいで、思わぬ処に思わぬものが出てくるのであろうか。此処、ヴァンダ鉱山の宝石売場の近くのレストランで北島神父を待った。この付近では名の通った神父らしい事が解った。宝石屋、レストランの人も北島神父を良く知っていた。北島神父が顔を出した。もう初老期を迎えている顔であった。話をしている内に彼の童顔が戻って来た「先生、私は自分の説教に先生の父上がかかれた「水の味」と先生から頂いた「ホスピット」を使用させて貰っています」と言う彼の顔は輝いていた。「先生、今から私の教会を見て下さい」と彼の車で案内してくれた。約二十分の処に木造の見事な教会があった。「この教会は選挙の時に動く運動資金を利用して作りました」彼は笑顔で話をしてくれた。「アルゼンチンに着いてから大病に罹患し、この地の多くの人の善意で助かりました、それで私はこの国に骨を埋めます」と淡々と話をする彼には強い情熱を感じた。母親が長崎市内の病院に入院していると聞いて訪ねる事を約束した。短い時間であったがお互い

万感の思いに駆られたのは今回の貴重な産物であった。将に「一期一会」の感を深くした。



その後、近くの国際空港から右近倍枝はサンパウロへ私共はブエノスアイレスの空港へ飛んだ。私共のアルゼンチンでの宿はブエノスアイレス・コンチネンタル・ホテルで倍枝さんの息子のアンドレ君とアルベルト君が面倒を良く見ってくれる。夕食をホテルの紹介で近くの中料理店へ行ったが、味は余りにも中華の味とは違っていた。何代か続いている内に現在の味に進化したのであろうと想像するだけであった。朝食はバイキング・方式で主に果物を摂った。コーヒーもブラジルに負けない味わいがあった。翌日の午前中、七十才近い日本人のガイドが車で迎えに来た。早速、ブエノスアイレス見物へと出かけた。この町はスペイン風でとても町並みが綺麗であった。話によると、アルゼンチンでは乞食でもネクタイを締めているとの事であった。カミニートはヨーロッパから移民がくる港町で、この港近くの町並は(海ではなく川)原色で色彩鮮やかで、タンゴの発祥地と言う説明を受けた。市内見物には数時間を要したが、記憶に残る印象深さに何かがか欠けている様であった。



ブエノスアイレスには今年二十数年振りに雪が降ったとの話はアルゼンチンを南国と思っていた私の感覚を驚かした。昼食はスペイン風の肉料理で、ブラジルのもと同じいい味であった。市内の中に墓地があるのはこの町が次第に発展して行った歴史を感じさせた。夕食は Esquina Carlos Gardel でタンゴ・ショーを見ながらのものであったので私はホテルで休息する事にした。ルーム・サービスで夕食のサンドイッチを摂ったらとても食べきれない程の量であった。



寝ていると夜遅く家内達は帰って来た。豪華な食事を済ませ、アルゼンチンタンゴのショーが始まるのは九時頃からでアルゼンチンでの最高級の踊り手でショーは素晴らしかったと家内は話をしていた。ロベルト君がデジカメでショーの写真を撮って来てくれた。翌日、買物を済ませ、特にワインが美味しいとの事で数本を購入した。夕刻エザイザ・国際空港からサンパウロへ向かった。アルゼンチンでの思い出は北島神父との出会いが感激的であった。カトリックの神父は単独で行動出来る強みを持ち、地の果てまで布教に行ける強さを彼にも感じさせるものがあった。

第四章大林文武君の墓参

アルゼンチンから帰った翌日は斉藤さん夫妻、秋村君、堂園さんと共に右近家ですき焼き会を開き、又、日本の思い出話して賑わった。七月十三日に理髪店を右近和雄さんから紹介して貰った。店は旧日本人街（現在は中国人と韓国人が中心）にあって、熊本の人の経営で「熊本弁」が懐かしかった。翌日（七月十四日）斉藤さん夫妻とクリチイバへ行く。斉藤さんはご主人の母親のお見舞いと言っていた。クリチイバ空港にはローザさんとアンドレ君の奥さんと娘の「まゆみ」さんが待っていた。ローザさんの運転でレストランへ行く、其処へ大林一家が揃った。アンドレ君と妹二人がそれぞれ良き伴侶を伴って来た。このレストランはバイキン様式だが、食器に食べ物を摂るとその量を測定し、最後の総量で支払いをする仕組みであった。大林一家は壮観であった。ローザさんの躰けがいいのか皆さんはそれぞれの立場を良く弁えて行動しているのが印象的であった。



意味がありません」と言われたのを思い出した。この最後の来日で彼は私にお別れを言いに来たのではなかったのではと思った。時は静かに流れた。家族が再び墓地に揃い記念撮影をした。公園みたいな墓地は開放的で静かな佇まいを見せていた。ローザさんの運転で彼女のアパートへ行った。その夜は又、大林一家全員が揃い、ローザさんの手作り料理を頂いた。



レストランを後にして、ローザさんの運転で文武君が眠る墓地へ向かった。それは町から少し離れた場所で、公園みたいな作りで花屋があり、其処で花を購入して、墓地へ車で行ける。何と文武君の墓地の近くに斉藤さんの墓地があり、斉藤さん夫妻と再び会う。墓地には金属で出来たプレートに文武君の名前と死亡の月日が刻み込めてあった。



アンドレの長女の「まゆみ」さんが座を引き立ててくれた。愛嬌が良く、日本語学校で習った日本語の歌を歌ってくれた。二十九年前にブラジルへ来た時はアンドレが二才の時であった。それが良き医者となっているのは嬉しさと驚きで感慨無量であった。翌日は斉藤さん夫妻がクリチバの町を案内してくれた。ワイン専門店で購入した。市場を覗いて見て大林君と夕食の材料購入に行った事を思い出した。サンパウロの市場とはその大きさの規模は違い、面白いのは日本食の材料が豊富にあった。果物はブラジルでは何処も同じで品物の豊富さは圧倒された。



私は花をそえ万感の思いを込めて合掌した。彼の発病を知ったのは彼が二回目の来日をして、帰国直後の事であった。文武君が（49才）病に倒れた。然も、骨髄性白血病らしいとの一報であった。その後純心聖母の会を通じて容態の知らせが入って来た。彼の骨髄の標本を送って貰い、それを長崎大学の専門医に診断して貰った。「先生、これは難病です、日本ではまだ治癒する方法はありません。日本へ搬送する



昼はローザさんのアパートの一階でシユハスコ料理を大林一家と共にする。アンドレが肉を焼いてくれた。



昔、大林文武君が自宅で焼いてくれた肉の味を思い出させるものがあった。その時は私は大量に食したが今回は余り量はすすまなかった。この日の夕食はローザさんと三人で食した。ローザさんの思い出話は遠い昔の物語りであった。

クリチバ在住の文武君の姉のラウラさんが家内をクリチバのソロプチミスト会長の処へ案内して下さった。ローザさん、斉藤やす子さんも同行した。この地のソロプチミスト活動は盛んな様で、仕事内容、それに会の作業場へ案内して貰った。昼食時で、作業場の従業員は門を開けてくれない。日本だと「会長！」と言って直ぐに対応するのであろうが、ブラジルでは食事中は自分達の時間として守り、時間が来るまで門を開けてくれなかった。会長と一諸に全員雨の中で待った。これは日本では味合う事が出来ない経験であり、会長も黙って冷たい雨の中で待っているのに感心した。作業場の門が開き、作業内容を見せて貰った。奉仕活動は何れの国も同じ事なのだと理解出来た。その後、純心聖母の会の日本語学校を訪問し、シスター田中さんの案内でクリチバに新しく建設中の老人ホームを見学する。土地面積は広く、大きな建物が建設中であった。内装は資金が出来次第に作るというブラジル方式ののんびりしたものであった。内装の一部は完成しているが、入居者を入れる段階ではない。シスターはのんびり仕事を進めて行きますと笑顔で話しをしていた。





この日はラウラさんの招待で昼食は日本料理店へローザさん、斉藤やす子さんと共にいき、夕食はローザさんとローザさんの娘と彼女の配偶者とイタリヤ・レストランへ招待された。今回はラウラさんの心の籠もった御持て成しを頂いた。翌日（七月十七日）は朝から文武君の墓参を済ませ、クリチバ空港へ向かった。すると我々が予約していた航空便はキャンセルで今の航空機に搭乗しなければ次のはかなり遅くなるという事で、ローザさんとラウラさんにお別れをした。アンドレ達が空港へ向かっているので、搭乗を延期したらとローザさんが言ったが、航空事情が不明なのでそのまま搭乗した。これが幸いしたのはその夜のテレビ放送でクリチバ空港から飛んで来たサンパウロ空港で大事故が発生していた。若しも、あの時、あとの航空機に搭乗していたら、先ず無事にあの飛行場には着陸出来なかったかも知れなかった。サンパウロに早く着いたので、斉藤やす子さんのお店に立ち寄った。店の二階に原爆対策事務所があり、やす子さんの父上・森田隆さんから今まで続けられたブラジル在住の（来日は約三十回以上）被爆者救済運動の苦労話をお聞きした。次の日（七月十八日）は午前中は休息し夕刻、斉藤さんの家での夕食会に招待された。



第五章 憩いの園・見学と日本市場

翌日（七月十九日）は秋山君の案内で二十九年前に訪問した「憩いの園」を訪問した。朝、秋村君の運転でかつてサンパウロ郊外にあった「憩いの園」へ出かける。憩いの園の管理者の一人が同乗する。約1時間程で到着した。当時は森に囲まれた園であったが、現在では町のど真ん中と言う印象を受けた。園の経営者の人達と挨拶を交わし園を案内して貰った。昔とは全く変わり、近代的な設備を備えていた。食堂は明るく、内装も綺麗なものに変貌していた。



私が知っている人もいたが、その人は認知症に罹患しているとの事であった。私がかつて訪問していた時の人はすでに七十才から八十才に高齢化しているのであった。死体置き場もモダンな構えになり、昔と同じものは講堂の内部で演台がそのままになっていた。秋村君に「何か役に立つもので、若しこれが欲しいと思う物があったら連絡してくれ」と頼んだ。「憩いの園」の見学は歳月の流れの速さを知るだけのものになってしまった。「憩いの園」に別れを告げて、秋村君の案内でゴルフ場を見に行こうと言うので簡単に「OK」して、後で後悔した。

直ぐ近くですよと言う彼の言葉をそのまま受け取ってしまったのであった。ブラジルでの直ぐ其処と言うのは、時間にして約一時間の走行を必要とする事であった。遠い道を延々と走り、やっとゴルフ場に到着した。ブラジルでは先ず土地を購入して、ゴルフ場を作り、その後、周辺を売却して、ゴルフ・ハウス、それにゴルフ関係の店を作るのであった。ゴルフ場は出来ていて、簡単なハウスが付属して作られてあった。広大なゴルフ場は日本の数倍の広さで、初心者コース、上級者コースが作られてあった。暫く休憩して帰途に着いた。この日のドライブは些か身体に疲れを感じさせた。早めに休む。「間もなくブラジルを去る日が近づいている」と思うとブラジル滞在一ヵ月とは弓矢の如く去った感じであった。七月二十日は宝石商（右近和雄さんの妹経営）に立ち寄り、平坂テレサさん（現在長崎在住で元留学生・私の家からお嫁入りした）の母上の所へアンドレ君の運転で出かけた。高級ビルが林立している町並みで其処のアパートにテレサさんの母上と姉さんが住まわっていた。思い出話に時間を忘れ、昼食をご馳走になる。アンドレ君の食欲をもってしても余る量の肉料理であった。母上はパソコンで子供達にメールで交信なさるモダンな母上であった。別れを告げて、近くの高級店に入って見た。雑貨店にしても全てが高級品であった。底辺の町並み、高級な町並みが見事に混然と点在しているのはブラジルの経済状態を表している。裕福さを獲得すれば、この町並みに住み、収入が減少すれば此方の町並みに住めると言った事が何気なく

出来る所がサンパウロの住み安さの象徴であろうか。七月二十一日には再度、サンパウロの市場へ出かけた。豚の腿肉を焼いてパンに包んでくれた店の若者とは親しくなったし、この様な食し方に慣れてしまった。この日は日本市場が開催されていた。その日は市場で大きな伊勢えびを購入してそれを右近さんの友人と共に夕食時に頂いた。この日は、サンパウロ最大の市場から、日本市場の会場に向かった。其処では森田さんが原爆被爆者救済の一万名署名活動をしているからであった。会場は広く、各県の特産品の展示がしてあった。長崎県のは私が知らない特産品が出ていた。森田さんの処では斉藤やす子さんが中心になって署名活動をしていた。会場の一角に裏千家の茶室が作ってあった。家内は早速、招待されてお手前をしていた。その後、森田さんの所に秋山君、堂園テレサさんが集まった。

第六章：帰国を前に、そしてお別れ

翌日（七月二十二日）は右近家の別荘へ遊びに行く。和雄さんはこの時は元気に見えた。豪華な住いに庭には大きな池があり、夏には水泳が出来るらしい。帰宅してから夕食時には堂園テレサさんがやって来た。二十三日は朝から家内はお土産買いに出かけた。

夕食時には秋村君、堂園テレサさんそれに哲学者（実名・？）アリストテレスがやって来た。別れが辛く感じたのはこの時であった。今回の旅行は全て人との出会いであった。観光をしたのは、イグアスの瀧とアルゼンチンのブエノスアイレスであったが、再会出来た人との出会いは心に焼きついた。其処には時間的空白約三十年と言う現実があったが、それを全く感じる事は無かった。ブラジルでの食事の思い出は昔と少しも変わらなかった。全てが時間の空間を取り除き、再会と言うより会ったのが昨日みたいな感覚であったのが不思議であった。

空港で斉藤夫妻、右近夫妻、アンドレ、アルベルト両君、秋村君、堂園さんと別れを惜しんだ。私は目頭が潤んでくるのを我慢するのがやっとであった。航空機は静かにサンパウロの空に舞い上がった。 Adios!

終稿の筆をとって

約一ヶ月の旅を終えて、それが将に相馬灯の様に過ぎ去ったと言う印象が否定出来ない。人生とはこう言うものかも知れない。思い出は時間が経過するに従い美化されてくるものである。人生で最も貴重な事は人との出会いであろうか。それは時間的、空間的なものをこえたものであろう。

何年経過しても、何時までも心に残る思い出を持ち得た喜びは何物にも変えがたい貴重な体験であった。喜びも悲しみそして悔恨も全て思い出の中で美化され、何時までも心を豊かにしてくれると秘かに思った。言葉、肌の色、文化等の違いを超えて私は貴重な時間を過ごした記憶は何時までも心の奥底に「癒し」として持ち続けるであろう。

